

5月号は、今までになく会誌全体が充実してきたのではないかと思います。皆さんの作品がそれなりに力をつけてきて、存在感をもってきたからではないでしょうか。共通の素材・テーマで書いて見ることは、各自のなかの客観的な視点から取り組むこととなり、それが作品のリアリティをもたらすのではないかと思います。これからいろいろやってみたらいいと思います。ところで、年配の方が春の土にいのちの元気をもらい、比較的若い方がひどく痛めつけられているのは普遍的な問題なのでしょうか。それとも、個の問題に帰するのか、時代や社会のなせるところなのでしょうか。話してみたいテーマです。

1 好き！

桜

ほらなおったよ（童謡）

小太刀美恵子

「好き！」と「桜」は同じテーマを同じ人が内側と外側から書いたものですが、皆さんはどううけとめますか。「好き！」はストレートで魅力的なのですが、よほど注意しないと詩として破綻してしまいます。3連のところは工夫が欲しいところです。作者の純朴なすがたはいつも同じですね。

2 春が来た

さくら幻想

黒川フミ

2編とも掘り込みの弱い作品です。成熟させる時間がたりないようで、少し疲れがあったのでしょうか。スナップ写真にしておいて、いつかどこかで使える断片ですね。

3 くちづけ

塩入佳子

占領下の日本の農山村に軍用ジープで回ってきた米兵の話は映画、ビデオなどで見聞きしていますが、この作品のような印象を与えるものではなく、もっと屈辱的であり、もっとおぞましく暴力的なものばかりだったと思います。はらはらして読ませる展開ですが、最後にきて、秋の「鉄の音がする」から、右頬をちぎった「くちづけ」、「エメラルドグリーンの爽やかさ」となるとイメージの連関に無理があると思いました。「秋の鉄の音」に焦点を当てて展開されると散文詩としての構成と彫の深さが期待できると思いました。

4 桜の花が終わるとき

桜・クラゲ（自作）

小林まもる

5 迷い

岡嶋保之

桜の季節、「4月は残酷な季節」と誰かが書いていますが、定年まじかなサラリーマンにとって桜の季節は世代交代の季節、自覚して消えていくつらい不安なときでしょう。詩はそのとき自分にとって何なのか、深く問い返すとても貴重な時間です。「きっと暖かい春の風が吹いてくる」ことは滅多にないことを覚悟したところに詩があるのではないのでしょうか。詩は逆境においてこそ育っていくものではないのでしょうか。

6 ルーズコントロール

さくらの街

武田裕也

4月、こんな痛ましい心象に陥るのは独自の感性だろうと思います。この浮遊感覚を持って、言葉で世界へ切り込んでいくことが必要ではないのでしょうか。そうすることで、立つ位置が見えてくるのではと思いますし、其処が詩の誕生の場になるのではと思います。LOSE・CONTROL は二律背反の意味になりますが、心理療法などにある用語なのではないでしょうか。「さくらの街」では、さいごの「ここはさくらの街 自分と同じ風が吹いている」を軸にして、何が自分と同じなのか、掘り込んで欲しいと思います。

7 春の胎動

宮坂芦畔

われわれの世代への励ましのよう聞こえました。マイペースで投稿を続けてください。

「おお 新鮮な黒土よ いのちならば受けてみよ
その眠りから覚めた息を吐き わが米寿の鎌の一撃を」

8 霧の中から

さくら

春の北（昭和53年作）

伊藤賢治

3作とも力のある作品です。ところどころに表現上の難点が見えますが、少し時間を置いて、言葉の弛みがないように推敲してみてください。「霧の中から」は今まで見せていただいた伊藤さんの作品の中で一番いいように思いました。「春の北」では、暗喩のシャープさ、若さに惹かれました。「僕はなお二人の背姿に 革命の雷管をきつく握った」「春はいつも北の天に住まっている 逆さまに」など

<資料> * * * 今回は、鹿沼市に住む著名な“さくらの画家”荒井 慧 さんのお話です。

